

天歎焉、即為之烏頭白、馬生角」（傍線筆者）との呼応で考えると、単なる「かの青い天を振り仰いで是我が身の不運を訴える」といった抽象的な解釈からより具体的に燕の太子丹が、秦王より無理難題をふきかけられ、その時に自国の燕に戻りたいがために、必死に天にこの難題の解決を祈った太子丹の姿がそのまま道真のそれにダブると見れば、「太子丹が天にひたすら祈って鳥の頭が白くなり馬に角が生えたので、本当に自国燕に戻ることの許可が出たように）わたしもひたすら天に祈ることで、京に戻れる日を待ちわびたい」といった解釈が可能になってくるように思う。つまり、この「476自詠」と「514謫居春雪」の二詩の呼応がなされることで、より道真の意図するものが増長され、又、心ある読み手にそれを効果的に伝えることが出来ると、道真自身が考慮した上で配置ではなかったのだろうか。

その意図するものとは、すでに菅野氏が指摘されている「道真の感傷は単なる個人的悲哀にとどまるものではなかったのである。それは、個人や私を超えて。より広く社会や国家の現状と将来がこれだよいかという憤激を、底にたたえていたものではなかったらうか。」<sup>22</sup>の一文が参考になる。「476自詠」の一句目「離家」で屈原の故事を想起させ、「514謫居春雪」の三・四句目で蘇武や太子丹の故事を想起させているのは、いずれも単なる道真個人の「望京の念」の表出の典拠と見るより、故事の中の人物が、いずれも個人レベルの利益よりも、自国の利益を優先させ、それに自分の命を賭けたところに注目すべきだと思う。換言するならば、「514謫居春雪」を敢えて巻尾に配置した意図の考察として、この作品を道真個人の、どうしても断ち切ることの出来なかった「望京の念」の表出したものという取らえ方は、余りに狹視的な解釈のように思えてならないのである。

確かに、死期の迫ったことを自覚している道真にとって、最後の最後まで自分が放免され京に戻ることができ、それをひたすら信じていたという見方は、道真の太宰府左遷をどうとらえるのかという点と深く関わるが、そ